

自分でつくった野菜や採ったキノコや山菜、イノシシなど調べる
川内村と富岡町に設置された食品放射能簡易試験場

食品の放射線量を「数字」で見えるように



川内村や富岡町では、食品の放射線量を測る施設があります。

「食べて大丈夫なのか?」。それを数字で見えるようにして不安をなくします。

線量が高いものを見つけ、注意して避けることも可能にしています。

チ

エルノブイリの事故後は、食品の出荷制限などが行われず、小児甲状腺がんなどの増加が問題となりました。しかし、福島ではその時の教訓を生かし、食品の出荷制限が行われました。

「福島の放射線対策で大切なのは、内部被ばくの低減化です。具体的には、放射性セシウムを含む食品をなるべく避けることが重要となります」と、高村教授は言います。

そうして強化された対策が、食品に含まれる放射性セシウム濃度を、自分で測定できる仕組みを整備することでした。それが2012年から運営されている「食品放射能簡易試験場」です。今では、住民の間では「食品検査所」として生活に密着した存在に



川内村の食品検査場で測定を担当している猪狩良一さん

数字ができて
安心感につながる

川内村の食品放射能簡易試験場で検査を担当している猪狩良一さんは、「原発事故直後から、県内でも福島県の食品が別売りされるところを見てきました。福島のお米が捨ててあると言われ、がっかりしたこともあります」

なっています。

と、振り返ります。そして、「みんな自分の食べる物にどれくらい放射性セシウムが含まれているのか、すごく不安を持っていました。検査を始めてからは、一部の山菜やきのこ等は未だ放射性セシウムが検出されるものの、その他の食品については検出されないことや低いということを確認することで安心して食べることへとつながっています」と、検査がもたらす効果についても語りました。

富岡町食品検査所では、簡易に測定できる非破壊式測定器に加え、詳細に測定できるゲルマニウム半導体検出器を導入し、2019年1月から新たに住民の不安を解消する充実した施設が整備されました。除染も進み、モニタリングポストで

は目で見て空間線量が低くなったことを誰もが確認出来るようになり、住み慣れた故郷へ帰還する住民も増えていきます。検査を担当する富岡町復興推進課除染対策係の滝沢宜之さんは、「帰還した住民は、住めるかどうかという不安から、次の段階として、より安全・安心に暮らすという食の安全性へと不安の重心が移行していると思います。自分達が食するものの放射性物質を自分達で測定し、結果を目で見て確認できるという環境を提供することは住民の不安の解消に繋がっており、非常に重要だと感じています」と施設の重要性を語ります。



富岡町で食品検査を担当している滝沢宜之さん